

観測部月報

Monthly Report, Observing Section, O. A. A.

★

東亞天文協會

★流星課 METEORS (130) 課長 小楨孝二郎 (K. Komaki, President)

十月はオリオン、双子の流星群を中心に、流星数はかなり多い。主要なる流星群は、下表の通りである。

期 間	極大日	輻射點	附近の星	備 考
十月 9-11日	10日	263°+54°	龍 μ	緩, ジャコビ (=P=6.6年)
15-25	22日	92 +15	オリオン δ	迅, 痕ハリ (Ω) } 顯著
20-28	23日	98 +14	双 子 γ	迅, 痕 } 輻射點移動
十月-十一月		43 +22	羊 41	緩, 輝, 火球

本年は、24日に満月がある爲、下旬のオリオン及双子の流星は、観測條件が悪い。但し、初期の出現程度を捜るのは、大いに意味がある。10日前後のジャコビ流星群は、新月と一致してゐるため、観測は絶好である。しかし、この母彗星は、今、遠日點をうろついてゐる時分だから、あまり多くの流星は期待し得ないだらう。以上の外にも羊、牛附近に流星は相當あらはれる筈である。

× × × ×

七月25日23時32分、徳島市の福永氏は、金星に數倍する光をもつ火球を観測された。“ベガソス”下部より“うを”座へ約20度、繼續時間3秒、其の間、速度はVSよりVVSに落ちて、色は白青であつた由。他地方の観測者の報告を期待する。

七月末の水瓶座の観測はまだ諸方からの報告に接しない。八月9日より開始さるゝペルセウス流星群の協同観測を前にして、観測者は手ぐすね引いて待機してゐる筈である。同時観測の成果をいのりつつ。(八月8日)

★太陽課 SUN 幹事 大石辰次 (T. Oishi, Secretary)

六月分報告追加 西尾利夫、観測日數10日、相對數平均4.1。蔡章献、観測日數20日、相對數平均12.5。

観測状況 本月は稀有の好天に恵まれて本年の今までで最良の成績を得たのは喜ばしい。特に保積氏は1日の缺測も無く、木邊部長も28日の好結果を得られ、視相も略々良く、群數も多からず、爲に容易な観測を行はれたと思ふ。

黒點の活動 無黒點日は4日を數へ、群數も3群を超ゆる日は無かつた。著しい

太陽黑點相對數報告 (1942年七月) Sun-spot Relative Nos., July, 1942.

觀測者 Obs. (觀測地)	七高天文部 (鹿兒島市)	坂上務 (鹿兒島市)	津留繁雄 (熊本市)	西山峰雄 (福岡市)	正田源一 (大阪市)	筭井泰雄 (京都市)	木邊成磨 (滋賀縣)	竹內潤 (名古屋市)	加藤裕成 (名古屋市)	大石辰次 (靜岡縣)	香掛七二 (長野縣)	金田伊三吉 (石川縣)	松下淑 (東京市)	高杉重春 (東京市)	保積善太郎 (東京市)	山田勇次 (東京市)	觀測個數 No. of Obs.
口徑 mm	135	42	122	32	38	45	75	32	75	55	102	55	47	55	75	75	十六名中
倍率 x	71	64	48	45	65	53	60	50	40	64	75	64	64	64	64	80	
方法	P	P	P	D	D	D	D	D	P	D	DP	DP	D	DP	DP	D	
1	R	R	M	C	C	C	R		C	C	C	0	0	0	0	0	5
2	C	R	R	12	C	R	R		C	C	C	C	C	M	13	M	2
3	R	R	R	15	13	C	R		C	C	C	16	C	C	13	14	5
4	R	C	C	16	15	14	15	20	M	16	C	19	16	15	16	15	11
5	C	C	C	30	32	32	37		M	42	C	37	36	31	34	M	9
6	C	26	C	29	34	36	39	50	52	C	C	36	38	31	46	32	12
7	C	M	34	29	C	31	37		45	36	C	33	36	34	40	31	11
8	45	M	M	29	33	33	32	39	47	C	M	C	33	29	35	34	11
9	20	M	M	28	30	31	44	22	41	C	31	20	19	15	32	17	13
10	19	M	18	M	17	16	21	21	23	C	24	18	17	16	16	15	13
11	16	M	14	13	14	12	20		19	14	M	15	M	M	20	15	11
12	12	M	15	M	12	16	19		17	16	M	16	M	13	14	12	11
13	13	23	36	11	23	11	23		13	29	46	13	M	22	13	M	13
14	0	23	11	0	0	22	11		M	11	C	C	M	M	11	M	9
15	0	M	0	0	12	33	35		12	R	C	22	C	R	13	11	10
16	13	M	12	12	13	35	14		12	12	C	13	R	R	13	C	10
17	17	M	14	12	12	12	0		C	R	C	16	0	0	16	0	11
18	0	M	0	0	0	12	0		0	0	18	11	M	M	0	0	12
19	0	M	12	0	11	12	12		0	12	15	12	M	11	12	M	12
20	12	M	C	0	0	33	11		0	11	M	13	13	12	12	M	11
21	18	M	16	M	13	13	16		0	14	15	15	14	M	13	M	11
22	18	14	M	M	12	12	18		C	15	C	13	M	M	13	M	8
23	0	15	12	M	0	13	12		0	12	14	12	0	0	13	M	13
24	0	0	0	M	0	0	0		0	0	M	0	M	0	0	M	11
25	0	0	M	M	0	0	13		0	0	M	0	M	0	0	M	10
26	0	0	M	M	11	0	12		0	0	11	0	M	0	11	M	11
27	11	12	M	M	11	11	11		11	11	M	11	M	0	11	M	10
28	17	24	M	M	12	11	11		24	11	11	11	M	0	23	M	11
29	15	24	11	M	22	23	22		24	23	25	C	M	0	37	M	11
30	36	37	22	M	33	22	11		13	11	38	R	M	11	35	M	11
31	C	M	23	M	22	4	25		M	24	M	11	M	11	24	M	8
日數 Days	23	12	18	17	28	28	28	4	22	22	11	26	12	22	31	13	317
平均 Mean	12	17	15	14	15	19	19		16	15	23	15	19	11	18	15	

註 Remarks: 西山氏 M.N., 13—20^日は 30mm, 33× を使用.

群としては5日東半球に突然出現の有核黒點を中心とする集合群で14日には西没し、更に29日東端に稍類似の群型で現れて目下西進中である。因みに本群は南緯2度（沓掛氏測定）である。本月は總じて短期の群が多く、8群は3日を経過せず消失した。高緯度群では30日北14度に東現して居る。

南北別相對數

木 邊	北平均8	南平均11
沓 掛	// 2	// 20
津 留	// 2	// 13

雜錄。 黒點最衰期の夏の故か、各方面に例年に無い珍現象を惹起して居る。之等にも萬全の注意を怠らず、成行に興味深い觀察が行はれよう。口徑や倍率に度々變化のある觀測者は參考までに原因を並記され度い。昨今は高緯度群の出現を心待ち顔なのは何れの觀測者も等しい。

注 意： 今までにも度々注意したことであるが、天文觀測の正確度の責任は觀測者の各個人である、故に、何ごとによらず、觀測の報告は觀測者の名を書き添へて貰ひたい。この報告欄には、現に七高天文部の太陽觀測が報告されてゐるが、こんなのは、せつかくの報告であつても、整理のしやうが無い。一體、何故にこうした團體名で報告を寄せられるのであるか？ 了解に苦しむ。是非、次ぎの報告からは個人名を報告して貰ひたい。3人も5人もの人が觀測してゐられるのならば、各人別々に報告して貰ひたい。そうすると、整理や研究が容易となり、又、有意義となる。——天文觀測は、何についても、皆同様である。例へば、火星面の觀測報告を、今かりに團體名でよこされたとしたら、課長は、どうすれば宜いのか?! 太陽でも、流星でも、黃道光でも、彗星でも、皆同じである。（此の項、山本）

★黃道光課 ZODIACAL LIGHT 課長 山本一清 (I. Yamamoto, President)

佛印派遣の田村中尉から、去る八月13日の曉天の黃道光の觀測報告が到着した。黃道光と、黃道帶との連なりが立派であるが、銀河が少々妨げとなつてゐる。對日照もカスカに見えてゐるけれど、之は西天にあつて、低く、明瞭でない。

内地で夏の曉天の黃道光は、單に黃道の傾斜角だけでなく、銀河のために妨げられて見にくい。八月22日の朝、筆者は多くの人々と共に、堺市で之れを見たが、かなり困難で、初めての人とは殆んど確實には認めかねた。尤も、しかし慣れた人には、銀河と黃道光とは立派に見分けられたけれど。